

「小論文」 国語国文学科

受験番号					
氏名					

【問題一】 次の文章は、著者と編集者との関係性について記した随筆の一部である（森毅「編集者は作家より偉い」、高橋輝次編『原稿を依頼する人、される人』燃焼社、二〇〇三、所収）。この文章を読んで、後の問いに答えなさい。

新聞や雑誌の読者というのは、いろんな人間の文章を読むから、いくらかは流れがないと困るだろう。だから、編集者が文章に関係することは否定しない。極端な場合は、前に書いている人の文章がかたいから、なるべくやわらかい文章がほしい、なんてことだってあるだろう。ただし、マニュアルみたいに、みんなが同じ文章になってはつまらない。編集者のなかには、活字になったときの字面にこだわる人がいるが、行が一字で終わるとかいったことを、読者がそれほど気にするのだろうか。ぼくなんかだと、そのために句読点が増えたり減ったりするほうが、リズムが崩れて読みにくい。

文章をいじりたがるのは、教育関係の雑誌が多いような気がする。学校の国語教科書の場合が極端だが、「よい文章」の標準規格にしたがるのかもしれない。それと、若い編集者のほうが、文章のスタイルの幅がせまくて、学校文化から抜け出せないと思うのは気のせいかな。

文芸誌の名編集者が新人の文章に手を入れるという伝説があるが、あれはほんまかいなと思う。あるとすれば、その新人が大家になってしまっただけで文句を言えなくなることへの欲求不満じゃないか。作家の文章で妙な読みにくさがその作家の魅力であるのはよくあること。内容が伝わって読みやすければよいものでもあるまい。悪文もまた個性。

ただし、編集者は最初の批評家でもあるのだから、注文をつけたら文句を言ったりするのはあったほうがよい。それでも、編集者のイメージと違ったものが出てくるのは当然だから、はじめの計画にこだわられても困る。編集者と著者とのゲームのなかで生まれてくるのが文章。

学校文化というのは、内容があって、それが標準規格で表現されるように考えがちで、最初の計画が予定どおりに進行することに価値をおきたがる。編集者までが学校になってほしくない。

しかしながら、書く文章はまだしも、話す文章を編集者に活字にしてもらうときは、もっと微妙である。ぼくが話す言葉は関西風だが、関西弁は江戸弁に比べて言文一致の歴史が浅いので、活字になりにくい。もちろんのことに、話したことそのままでは読めたものじゃない。

取材で話した談話が活字になったときは、たいていいくらか違和感がある。直すとなると、全部を書き直さねばならなくなって、それでは編集者による取材でなくなる。はじめてテープで自分の声を聞いたとき、あるいは、はじめてビデオで自分の姿を見たとき、だれでも感ずるだろうが、自分の思っている自分は本来の自分ではない。編集者を通してのほうがかえって自分なのかもしれない。少なくとも自分で気づかなかった自分が出ているだろう。それが、おもしろいところ。

それに話したことすべてが出るわけではないし、どこを選ぶかが編集者の腕。若いころに、トークや座談会を記事にまとめる役をしたことがあるが、白紙から自分で文章を書く三倍ぐらい時間がかかった。

問一 文中の傍線部「若い編集者のほうが、文章のスタイルの幅がせまくて、学校文化から抜け出せない」とあるが、この文章において著者は「学校文化」と文章の関係を、どのように捉えていると考えられるか。わかりやすく説明しなさい。

問二 この文章の著者は、編集者の存在が書き手の文体にどのような役割を果たすと考えているか。それをまとめたうえで、これまで自身の文体にどのような存在や場が影響を与えてきたか、今後も文体の工夫をする際に、どのような存在や場が必要かについて、具体的に記しなさい。

「小論文」 国語国文学科

受験番号					
氏名					

【問題二】 次の文章は、石田梅岩『齐家論』の一節である。この文章を読んで、後の問いに答えなさい。

伏て惟に、御代の泰平目出度治る事、上は貴く下は賤く、尊卑の位まし／＼、有がたくも孝を鬼神に致、飲食・衣服・宮室の類は薄くなし、儉を用ひたまひ、恵みを万邦に垂んと、御力を尽し玉ふ。至（い）ち徳光輝（ひかり）普くあらはれ、すゑが末まで安穩に、照し玉はぬ里もなし。実に徒然艸にも、「世を治る道は、儉約を本とす」といへり。蓋 儉約と云事、世に多く誤り吝き事と心得たる人あり。左にはあらず。儉約は財宝を節く用ひ、我分限に應じ、過不及なく、物の費捨る事をいとひ、時にあたり法にかなふやうに用ゆる事成べし。 （中略）

扱此 御高恩いかにして報じ奉るべきや。明には知らねども、我身をおさめ、上を犯すことなきやうに慎み、父子・夫婦・親類・縁者、家の小者に至るまで、たがひに睦しく打和らぎ、吝きことなく儉約を守り、一人の小者、又は出入従ふ者をあはれみ助けたき志なり。これまでも、一家親み又人を恵むこと、元来さらにあらねども、第一自身のおごりつよく、費おほきゆへ、人を恵む仁愛の心も外に成行ぬ。親き親類の疎に成もかの奢ゆへ、一家の出会も物毎造作に、料理などもおおくなり、度々の出会もなく遠々敷成ぬ。これを以てみれば、奢は不仁の本となる。恐れつゝしむべし。今より後、常の出会は、茶漬飯・したし物などにて、木綿衣類なれば、をのづから心やすく度く。出会、親き上にもしたしくなり、且親類は言に及ばず、宿持手代出入の人々迄、若身上不如意なる者あらば、其詆を聞届、不実ならざることならば、何分力を合せ救ふべし。又家内を恵むにも、先木綿衣類なればあたらしく仕かへるにも心やすく、古き物は仕着の外に見合てつかはし、仕着の新しき物は、貯をかすやうに仕なし、又半季一季の者は、纔の給銀を取、布子一重を拵ゆれば、残りずくなになり、鼻紙代も不自由にて、甚不便の事也。たとへ盆正月に、百貳百の銭、又履などつかはしても、これらにて足るべしと思はれず。尤家により、奉公人により、高下次第も有べけれど、すべて是に准へがたずべし。夫故たまかにつとむる者には、折々の心付致べき事也。

扱又世間に人をつかふに、定りの仕着や給銀さへ渡しぬれば、事すむやうにおもひ、其外に心を付る人まれなり。奉公に出る人、親もと不自由ならざる人もあれど、多くは親里まづしきゆへ奉公にも出す。親もと豊なれば、乳母をも添、養ひ育る事也。然れども貧きゆへ、親の手をはなし、遙く奉公に出すものなれば、さぞかなしく不便に思ふべけれど、是は助たきといかんがすべき。又たすければ、助らるゝ事は、たすけたき事也。惣て田舎出奉公人は、布子一、*かたびら一重あれば、事足りぬと思へり。然れども、半季か一季過れば、傍輩の衣類多く有を見て、羨敷おもひ、不自由成親本へいひやれば、親は聞より不便に思ひ、借金して成とも、一つづもこしらへのほせ、最早能かと思へば、又たらぬものをいひやれば、拵る事は成がたく、のぼさねば子共が不便なり。いかゞして成とものぼしたく思ひ、なやみ煩ふ者多くいたましき事なり。かやうの類は心を付、助くればなる事也。夫故貧しき親兄弟に其苦勞をさせざるやうにいたしたき志なり。

問一 「儉約」と「吝き事」との相違を、筆者はどう考えているのか、現代のことばでわかりやすく説明しなさい。
問二 親類や家族、使用人に対して、どう接するべきか、筆者の主張を要約した上で、自分の意見を現代のことばでわかりやすく述べなさい。

【注意事項】

- 1 必ず「問題一」「問題二」の二問とも解答すること。
- 2 解答はすべて「解答用紙」に記入すること。
- 3 「解答用紙」は「問題一」「問題二」に分かれて、それぞれ一枚ずつ、合計二枚ある。
「問題一」「問題二」とも「問一」「問二」とそれぞれ記入したうえで、解答をまとめること。
- 4 「解答用紙」は裏面も使用することができる。

受験番号					
氏名					

二〇一八年度 教育学部学士入試

解答用紙

「小論文」国語国文学科

採 点 欄

No.

問題一

裏面使用可

ここから記入すること ←

ここから左には記入しないこと

受験番号					
氏名					

二〇一八年度 教育学部学士入試 解答用紙

「小論文」国語国文学科

[illegible]

No. 2

【問題二】

裏面使用可

ここから記入すること ←

ここから左には記入しないこと